調査報告

長尾山の古墳群（I）

―― 中筋山手古墳群 ――

関西学院大学考古学研究会

I. 序　　説

関西学院大学考古学研究会は前号（№3）のなかで、西宮市から宝塚市にかけて所在する仁川流域の後期古墳についての研究報告を行なった。その後、西摂地方における後期古墳の調査・研究をさらにすすめるにあたり、当研究会では西摂平野北方に展開する長尾山の古墳群をその対象とした。

(1) 研　究　史

長尾山の古墳群に関する調査・研究は、既にいくつかなされてきたが、主なものを列挙すれば次のとうりである。

① 昭和34年、石野博信氏による雲雀山東尾根古墳群A・B支群の発掘調査、ならびに長尾山丘陵の分布調査。『長尾山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第1集、昭和46年、森浩一編『論集終末期古墳』昭和48年所収）

② 昭和40年、是川長氏らによる分布調査。兵庫県教育委員会編『兵庫県遺跡地名表』

③ 昭和46年、高井悌三郎氏らによる平井古墳群を中心とした分布調査。『平井古墳群』（宝塚市文化財調査報告第2集、昭和46年）

④ 昭和47年、武藤誠氏らによる雲雀山東尾根古墳群A支群の発掘調査。『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第6集、昭和50年）

⑤ 水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」（古代研究　4号　昭和49年）
岡田　務「畿内における終末期の群集墳の一形態 ――とくに兵庫県宝塚市長尾山丘陵に分布する群集墳から――」（同上）

これらのうち石野氏の調査は雲雀山東尾根古墳群B支群を完掘し、小型横穴式石室と箱式石棺のみから構成される終末期群集墳の一様相を明らかにした。また長尾山丘陵全域にわたる分布調査を実施し、従来の名称を改め新たに「支群」・「小支群」の語をもって、分布状況、群構成の理解を試みた。このように石野氏の業績は画期的な成果を収め、長尾山の古墳群研究の基礎的資料となっている。

次に高井氏らの分布調査は宅地造成の危機に伴い緊急に実施されたものであったが、平井古墳群を中心とし雲雀山東尾根古墳群、雲雀山西尾根古墳群、山本古墳群、そして新しく加えられた山本奥古墳群の各古墳についての分布状況・規模の確認がおこなわれた。とくに平井古墳群については詳細な分布図が作成

された。

さらに水野氏は石野氏の報告をもとに雲雀山東尾根古墳群B支群を、氏一流の墓道の想定から群構造を論じ、岡田氏は平井・雲雀山西尾根・雲雀山東尾根の終末期群集墳より猪名川中流域をその生産基盤と推定し、かつ7世紀前半の歴史的背景との関連でこれを論及した。

(2) 名称の問題

以上のようにいくつかの調査・研究がなされてきたが、名称については完全に統一されてなく混乱をまねいている。かかる問題は長尾山の古墳群研究がいまだ浅く、全体像が把握されていないことに起因するものと思われるが、理解の障壁となっている事実は否めない。

従来なされた呼称を整理すれば、まず長尾山丘陵全体に所在する古墳群については、石野氏が「長尾山古墳群」として総称したのに対して、高井氏は「長尾山丘陵の古墳群」とし、あえて一括しなかった。それはこれらの古墳群の性格から一括する必要のないこと、古墳群中に長尾山古墳という中期古墳が存在しまぎらわしいことの二点を理由としている。同時に「支群」・「小支群」を「古墳群」・「支群」とそれぞれ改めた。こうした呼称法は以後定着し、武藤氏らの調査もこれに従い、『宝塚市史』(第一巻、昭和50年)でも概ね継承されている。ただ総称を「長尾山の古墳群」とし簡略化しているが、考え方としては高井氏に賛同するものであろう。

一方、「長尾山の古墳群」を形成するいくつかの「古墳群」(石野氏「支群」)の名称にも問題がある。前述したように「古墳群」は石野氏の「支群」を機械的に改めたもので、固有名称自体にはなんら変りなく混乱はないが、是川氏らの呼称法は「古墳群」を「群集墳」の語を以って表現している点、名称にいくつかの相違が存すること、すなわち古墳群そのもののとらえ方の違う点は従えない。

以上のごとく名称の問題は長尾山の古墳群の場合、根本的な古墳群解明と表裏一体となっており、極めて複雑化している。本書では、近年編集された『宝塚市史』の呼称法を使用したい。これによれば長尾山の古墳群は、東より雲雀ケ丘古墳群、雲雀山東尾根古墳群、雲雀山西尾根古墳群、平井古墳群、山本古墳群、山本奥古墳群、中筋山手古墳群の7古墳群によって構成される。

(3) 調査目的

名称にいくつかの問題点が内在しているように、長尾山の古墳群は分布状況についてかなり明らかになったほか、その群構造、形成過程の解明までは、なお多くの課題を含んでいる。全体像の把握において、これを大きく阻む第一の原因はその分布地域の広汎さにあると思われるが、一方においては複雑な歴史的背景による群構造、形成過程の多様性にあろう。しかしながら従来の調査・研究は、最明寺川以東の古墳群、とりわけ終末期群集墳に終始し単一的傾向にあった。言うまでもなく長尾山の古墳群は終末期に形成をみるのではなく畿内の一般的趨勢のなかで考えられる。あくまでも長尾山の古墳群全体を通して巨視的に見据えることなくしてはその歴史的背景を追求することはできないであろう。

他方、多くの調査の契機が如実に示すように、長尾山丘陵の宅地開発は著しく進行している。こうした現状のもとで、かっての分布図が理解しえない地区も出てきた。

そこで当研究会は以上の点をふまえて、今回の調査目標を従来あまり注目されることのなかった長尾山丘陵の西部地区、中筋山手古墳群に絞り、①長尾山の古墳群の西端確認、②開発に伴う地形の変化と古墳の現状把握、③長尾山の古墳群における当古墳群の性格解明、の三点を調査の目的とした。　（坂　井）

Ⅱ.　長尾山丘陵周辺の環境

西摂平野は、北の長尾山丘陵、東の千里丘陵、西の六甲山地によって限られ、南は大阪湾に接している。大阪湾に面する海岸沿いの低湿地は、武庫川と猪名川の堆積作用によって形成された沖積平野であり、海抜5 *m*の等高線をほぼ境界として北側の洪積台地である伊丹段丘に連なっている。この地域は、古代には海岸線が台地南側裾部、現在の国鉄沿線附近まで複雑に入り組み、「武庫の海」と呼ばれていた。現在では、平野部を形成した武庫川と猪名川は、伊丹段丘の東西両裾を流れ、低湿地を下って大阪湾へと注いでいる。

長尾山丘陵に目を向ければ、この両河川がそれぞれこの丘陵の西限と東限を区画し、西方の六甲山地と、東方の五月山丘陵とに隔てる。当丘陵では、多数の尾根がほぼ南に派生し、その谷間を勅使(てし)川、天神川、最明寺川が流れている。これらの河川は、武庫川や猪名川と平野部で合流する。また、長尾山丘陵においては、すでに宅地化が尾根の中腹、標高約100～140 *m*附近まで進んでいる。

次に弥生時代以降の歴史的環境について述べることにする。

西摂平野は、生活に不可欠な地理的条件に恵まれていたため、弥生時代の人々は古くからこの低湿地に生産基盤を求めた。この地域の弥生遺跡はかなりの数にのぼるが、これらを水系との関連から考えれば、平野東部の猪名川水系の遺跡と、西部の武庫川水系の遺跡とに分類できよう。

まず弥生時代前期においては、猪名川水系の遺跡として、尼崎市田能遺跡①、豊中市勝部遺跡②・上津島遺跡③があり、武庫川水系のものには、前期の単純遺跡として著名な尼崎市上ノ島遺跡④、これに隣接する栗山遺跡・庄下川遺跡⑤などがある。大部分の遺跡は後期まで存続する集落跡である。

中期に属する遺跡には、上述した遺跡の他、猪名川流域の尼崎市下坂部遺跡⑥、川西市加茂遺跡⑦、池田市宮ノ前遺跡、武庫川流域の尼崎市武庫之荘遺跡・常松遺跡などが知られている。以上掲げた弥生時代の諸遺跡のほとんどは、堆積土によって形成された低湿地の微高地上に位置し、水田耕作にも好都合であった。しかし、加茂台地上にある加茂遺跡、および千里丘陵西端の台地上に立地する宮ノ前遺跡、そして伊丹段丘突端に立地する武庫之荘遺跡などは、低湿地以外に存在しその限りでは異例であるが、水田は依然沖積平野に求められたと思われる。また、中期の石器を多量に出土した加茂遺跡は、長尾山丘陵眼下に存在する集落遺跡として重要視できよう。

この他、この時期には六甲山地南麓を中心に高地性集落が出現し、西宮市仁川五ケ山遺跡⑧、芦屋市会下

第2図　西摂地方の遺跡分布図

山遺跡[9]・城山遺跡、神戸保久良遺跡[10]・伯母野山遺跡[11]などが著名である。

後期になると、河川による低湿地形成がさらに南方に進み、平野が拡大し、遺跡数も増加する。尼崎市中ノ田遺跡[12]・猪名寺廃寺下層遺跡・東園田遺跡・若王寺遺跡[13]・水堂古墳周辺の遺跡・下坂部遺跡などが当時期の遺跡である。

以上のような弥生集落遺跡の他、注目すべき銅鐸出土地が西摂にある。特に銅戈を伴出した神戸市桜ケ丘[14]を代表として、箕面市如意谷、伊丹市中村、川西市満願寺・栄根、芦屋市打出、それに宝塚市中山[15]などが集落跡との関係において重要であろう。また、西宮市甲山山頂からは銅剣が出土している[16]。

古墳時代になると、まず長尾山丘陵あるいは隣接する五月山丘陵、刀根山丘陵など西摂平野を囲む景勝地に、早くから前期古墳が築造された。

竪穴式石室を有する典型的な前方後円墳として著名な万籟山古墳[17]は、長尾山丘陵のやや東寄り標高216 *m*の尾根頂部に立地する。そして、丘陵から若干南方に下がった武庫川流域には、円墳の安倉古墳[18]がある。

猪名川東岸の五月山丘陵には、池田市茶臼山古墳[19]・娯三堂古墳[20]が近接して存在し、また、刀根山丘陵では、豊中市待兼山古墳・御神山古墳[21]などが知られている。

古墳時代中期には、それまで主として丘陵尾根上に造られていた西摂の古墳は、台地あるいは平野部に移行する。その代表的な古墳群として、豊中市桜塚古墳群[22]と、尼崎市と伊丹市に分布する猪名野古墳群[23]をあげることができる。桜塚古墳群は、猪名川中流の東岸、千里丘陵西裾台地上に36基ばかり築造されたといわれるが、今はわずか5基を残すのみである。また、この地区には先に述べた銅鐸も出土している。桜塚古墳群と相対立するように猪名川中流西岸の平野部に位置する猪名野古墳群は、近接する5基の古墳（前方後円墳4基、帆立貝式古墳1基）で構成される古墳群である。

一方、旧海岸線附近には、尼崎市伊居太古墳・水堂古墳[24]、西宮市大塚古墳[25]、芦屋市親王塚古墳[26]などが点在し、この地域が海上交通の要衝であったことを示していると考えられよう。

長尾山丘陵における中期の古墳としては、最明寺川西側の尾根上に位置する前方後方墳の長尾山古墳をあげることができる。

古墳時代後期に入ると、長尾山丘陵、武庫川以西の仁川流域、あるいは六甲山地南麓に群集墳が築造された。

1独立墳と7古墳群から構成される長尾山の古墳群は、約150基の後期・終末期の古墳が広範囲にわたって分布する。これらを河川によって区分すると、勅使川以西の家形石棺を納めた中山寺白鳥塚古墳、勅使川・天神川間の中筋山手古墳群、天神川と最明寺川間の山本古墳群、山本奥古墳群、最明寺川以東の平井古墳群[27]、雲雀山東尾根古墳群、雲雀山西尾根古墳群[28]、雲雀丘古墳群となる。このうち、平井古墳群、雲雀山東尾根古墳群・雲雀山西尾根古墳群は、終末期の様相を呈する無袖の小型横穴式石室と箱式石棺のみからなる支群を有しており、7世紀前半においても造墓活動が続いていたことが確認されている。そして、これらの古墳群が位置する東部、最明寺川以東の古墳数は、他の地区と比べて圧倒的に多い。

なお、猪名川西岸には、川西市勝福寺古墳がある。

仁川流域の古墳群[29]は、6世紀前半から中頃にかけてすでに上ケ原台地上に2基の独立墳が築かれ、6世紀後半には、仁川をはさむ4つの古墳群がほぼ形成された。上ケ原古墳群、五ケ山古墳群、五ケ山西古墳群、仁川旭ケ丘古墳群がこれである。さらに7世紀になると、独立墳である入組野古墳が台地上に築かれた。

六甲山地南麓の後期古墳群としては、6世紀後半から7世紀前半にかけて造墓活動が行なわれた八十塚古墳群[30]がある。この古墳群は、朝日ケ丘支群、岩ケ平支群、老松支群、苦楽園5番町支群、剣谷支群の5支群によって構成され、約40基が現存する。

この他には、千里丘陵の豊中市たこ塚古墳群[31]、独立墳である池田市鉢塚古墳[32]、西宮市具足塚古墳[33]などが知られている。

なお、窯跡として、吹田市・豊中市に展開する千里古窯跡群[34]、長尾山丘陵に、平井窯跡[35]、勅使川窯跡[36]がある。

（衣　川）

〈註〉

① 尼崎市教育委員会『田能遺跡概報』（尼崎市文化財調査報告第5集　昭和42年）

② 豊中市教育委員会『勝部遺跡』（昭和47年）

③ 「上津島遺跡」（『豊中市史』史料編）

④ 尼崎市教育委員会『尼崎市上ノ島遺跡』（尼崎市文化財調査報告第8集　昭和48年）

⑤ 尼崎市教育委員会『尼崎市栗山・庄下川遺跡』（尼崎市文化財調査報告第9集　昭和49年）

⑥ 尼崎市教育委員会『溝平遺跡調査の概要』（尼崎市文化財調査報告第2集　昭和32年）

⑦ 末永雅雄『摂津加茂』（関西大学文学部考古学研究第3冊　昭和42年）

⑧ 武藤　誠「考古学上から見た古代の西宮地方」（『西宮市史』第1巻　昭和34年）

⑨ 芦屋市教育委員会『会下山』（芦屋市文化財調査報告第4集　昭和39年）

⑩ 樋口清之『保久良神社遺跡』

⑪ 若林　泰・斉藤英二『伯母野山弥生遺跡』（神戸市文化財調査報告6　昭和38年）

⑫ 兵庫県教育委員会『中ノ田遺跡』（兵庫県文化財調査報告第2冊　昭和46年）

⑬ 尼崎市教育委員会『尼崎市若王寺遺跡発掘調査概要』（尼崎市文化財調査報告第4集　昭和41年）

⑭ 兵庫県教育委員会編『神戸市桜ケ丘銅鐸・銅戈』（昭和45年）

⑮ 宝塚市教育委員会『宝塚市中山出土の銅鐸』（宝塚市文化財調査報告第8集　昭和51年）

⑯ 武藤　誠「銅剣の新資料」（『西宮文化』第17号　昭和46年）

⑰ 宝塚市教育委員会『摂津万籟山古墳』（宝塚市文化財調査報告第7集　昭和50年）

⑱ 橋本久他「古墳と伝承」（『宝塚市史』第1巻　昭和50年）

⑲ 堅田　直『池田市茶臼山古墳の研究』（大阪古文化研究会学報第1輯　昭和39年）

⑳ 富田好久「古墳時代の池田」（『池田市史』史料編1　昭和42年）

㉑ 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」（『豊中市史』本編１　昭和35年）
㉒ 　㉑に同じ
㉓ 高井悌三郎「考古学から見た伊丹地方」（『伊丹市史』第１巻　昭和46年）
㉔ 村川行弘「考古学からみた尼崎地方」（『尼崎市史』第１巻　昭和41年）
㉕ 武藤　誠「考古学上から見た古代の西宮地方」（『西宮市史』第１巻　昭和34年）
㉖ 武藤　誠他「考古学上から見た芦屋」（『新修芦屋市史』本編　昭和46年）
㉗ 宝塚市教育委員会『平井古墳群』（宝塚市文化財調査報告第２集　昭和46年）
㉘ 宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第６集　昭和50年）
㉙ 関西学院大学考古学研究会『関西学院考古』３号（昭和51年）
㉚ 村川行弘「八十塚古墳群」(芦屋市文化財調査報告第４集　昭和41年）
㉛ 　㉑に同じ
㉜ 　⑳に同じ
㉝ 西宮市教育委員会『具足塚発掘調査報告』（昭和51年）
㉞ 鍋島敏也・藤原　学『千里古窯跡群』（昭和49年）
㉟ 笠井新也「摂津国川辺郡平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」（『考古学雑誌』第５巻第９号）
㊱ 高井悌三郎『勅使川窯跡発掘調査概要』（宝塚市文化財調査報告第１集　昭和46年）

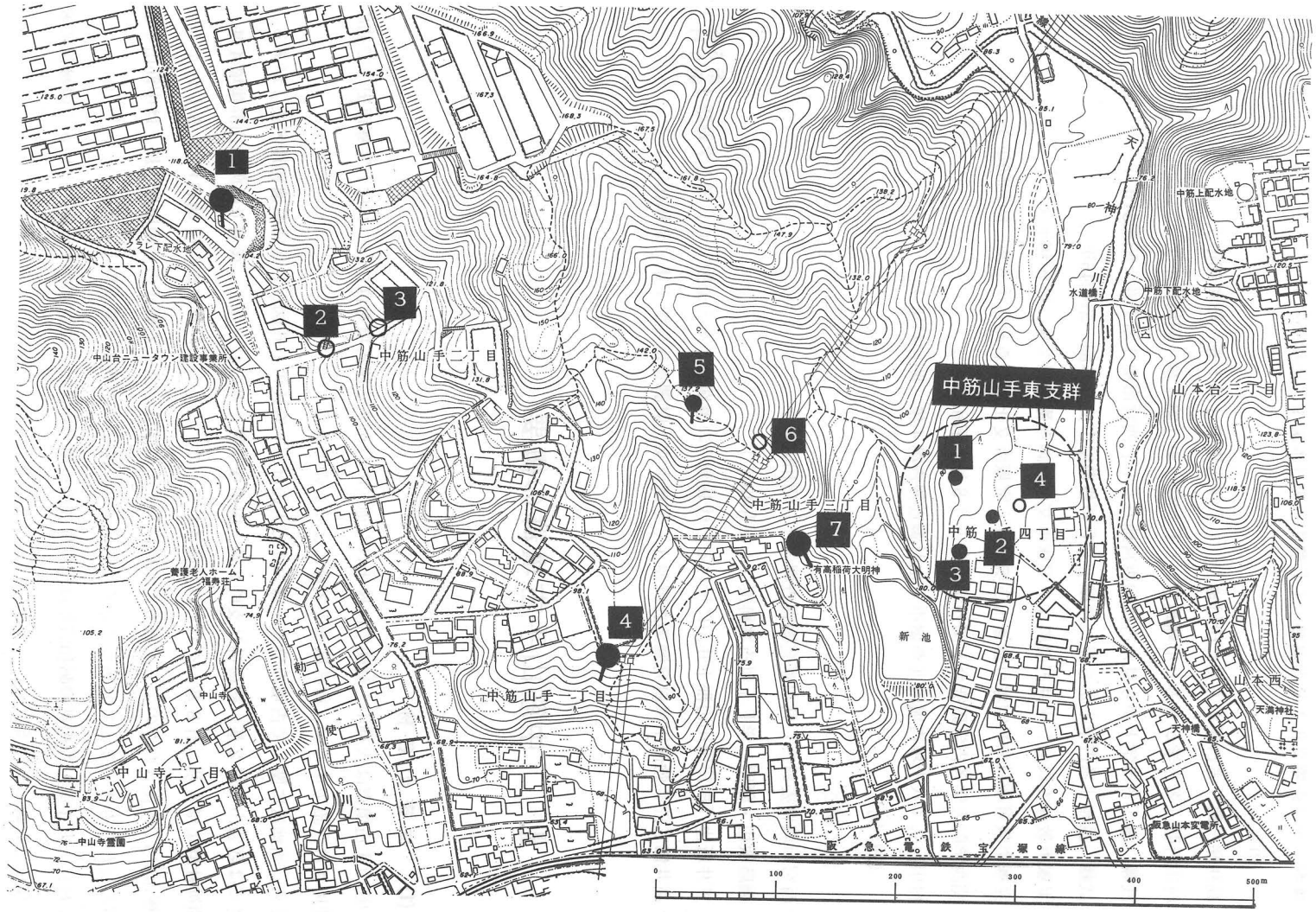
Ⅲ.　中筋山手古墳群の概要

(1)　従来の名称

中筋山手古墳群は天神川と勅使（てし）川に挟まれた地区に分布する諸古墳を含む。これは『宝塚市史』で初めて使用された語であるが、行政区画の名称によるものである。

従来、当地区に関して古墳の分布を報告するものは、石野氏の分布図と『兵庫県遺跡地名表』がある。前者では阪急山支群２基、稲荷神社支群２基、庚申塚支群２基の計６基が、後者では阪急山群集墳４基、稲荷神社群集墳４基の計８基がそれぞれ記載されている。こうした呼称は確かな地名によるものでなく『宝塚市史』で改正されたので、本書もこれに従うことにする。また石野氏の「庚申塚支群」は中筋山手古墳群のなかでもまとまって分布していることにより、特に「中筋山手東支群」とされた。

なお『市史』第１巻掲載の昭和27年長尾村作成の古墳分布図は、位置関係が正確でないがこの地区に８基の存在を記録している。



第3図　中筋山手古墳群の古墳分布図

(2)　分布確認結果

以上の報告をもとに中筋山手古墳群内を踏査し、分布状況を再確認した結果、現存確認墳７基、消滅確認墳２基、未確認墳２基であることが判明した。すなわち、『遺跡地名表』のいう「阪急山群集墳」内では、１基が誤認、石野氏の２基が未確認（２・３号墳）、１基が新たに確認（１号墳）、「稲荷神社群集墳」内では、１基が誤認、消滅が１基（６号墳）、「庚申塚支群」内では２基（中筋山手東支群１・２号墳）の他に現存墳１基（３号墳）、消滅墳１基（４号墳）を確認した。

なお、勅使川以西も踏査を試みたが、古墳を確認することはできず、売布（めふ）きよしが丘造成地直上で須恵器片１点が採集されたにとどまった。

(3)　調査の経過

現存が確認されたうち、中筋山手東支群の３基については昭和50年に調査が実施されており（２号墳は発掘調査、１・３号墳は実測調査）、当研究会では未調査の４基の現状実測調査を行なうことにした。対象となった古墳は、１号墳・４号墳・５号墳・７号墳である。

調査の経過は以下のとうりである。（坂　井）

昭和51年11月６日	中筋山手古墳群の分布確認。
７日	中山寺上方尾根踏査。
13日	５号墳実測調査。
20日	中山台から西の地区を踏査。
昭和52年５月７日 ８日 14日	７号墳実測調査。
６月18日 19日 25日 26日 ７月12日	１号墳実測調査。
13日 14日 15日	４号墳石室実測調査。
10月９日 10日	４号墳墳丘実測調査。

Ⅳ. 調 査 結 果

今回の調査対象地域は、長尾山丘陵全体からみれば西部、つまり勅使川と天神川に挟まれた東西約800 *m*にわたる地域であり、行政区画は中筋山手1丁目・2丁目・3丁目にあたる。この西部地域に派生する尾根に現存する4基の古墳について実測調査を実施した。これらの古墳は、勅使川側より中筋山手古墳群1号墳・4号墳・5号墳・7号墳とそれぞれ呼称され、同一古墳群に属する。

以下、各古墳の調査結果を述べることにする。

(1) 中筋山手古墳群1号墳 （図版1・2・10・11）

〈立地・現状〉

1号墳は、中筋山手古墳群の中で最も西側に位置し、中筋山手1丁目の道路沿いに存在する。この附近の尾根一帯は、すでに道路工事により大きく切断され、地形はその旧状をほとんどとどめていない。しかし、現状から推測するならば、古墳の立地する尾根は、当地域のほぼ中央を南南東に延びる主尾根から分岐して南西に派生する小尾根で、古墳は、この南傾斜面・標高108 *m*附近に造られた。現在、この附近は公園となっている。

〈墳　丘〉

1号墳近辺は、道路工事あるいは公園整備工事による削除、削平を受け、人為的な改変がみられる。道路に面する東側ならびに北側の墳丘裾部附近は、削除による平担な傾斜面が形成されている。ただし、墳丘上にある小路による墳丘変形はほとんどない。

2本の小路によって挟まれた墳丘南側は、比較的旧状を保っており、現在の墳頂は標高約112 *m*である。この高さは、築造時の墳頂をほぼ保つと考えられる。以上のことからすれば、石室入口附近、標高109 *m*の等高線がほぼ基底部と考えられ、径約15 *m*、高さ約3 *m*の円墳である。また、石室奥壁はほぼ墳丘中央部に位置する。

〈石　室〉

当墳は、主軸をN－5°－Eにとり、南に開口する両袖式の横穴式石室である。石室に使用されている石材は、全て花崗岩である。

玄室は、玄室長3.9 *m*、奥壁幅1.5 *m*、玄室袖幅2.1 *m*を測り、裾開きの台形状の平面プランをもつ。現状の床面は、側壁1段目の石材状況からほぼ床面に達していると思われる。なお、玄室中央部と奥壁附近の2ケ所に深さ約0.3 *m*、径約0.5 *m*の盗掘坑がある。玄室部には4枚の天井石を架構し、その高さは2.2 *m*を測る。玄室の側壁は、大型の扁平な石を4～5段積みし、隙間を人頭大の栗石で詰めている。もち送りは両側壁にみられるが、西側壁の方がきつくなされる。使用石材は、東側壁に比べ西側壁の方が若干小さく数も多い。なお、側壁の石材が4個崩落し、裏込め石が露出している。

奥壁は、2段目まで大型の石、3段目にやや小型の石を横積みし、さらに、隙間には人頭大の栗石が詰

めてある。

羨道は、現存長 3.7 m、玄門幅 1.2 m、羨門幅 1.4 m、羨道高 1.2 mを測り、玄室同様若干外方に開く。羨道の側壁は、幅約1 mの大型の石を両壁で縦積みし、玄門とし、玄室と羨道を明確に区分している。しかし、羨道には封土が玄門部まで流入し、側壁は他に羨門部の基底石の上面をわずかに露出するのみであり、羨道床面の観察は出来ない。羨道部には、1枚の天井石が遺存しているが、石室築造時にはほかに1～2石存在したと思われる。

今回の調査は、現状実測にとどまったため、羨道部で不明な点を残すが、石室現存長 7.6 mで、この数値は築造時に近いものだと考えられる。

〈小　結〉

中筋山手古墳群1号墳は、南面する緩傾斜に造られており、ほぼ旧状をとどめる。

墳丘は、高さ約3 m、径約15 mの円墳で、両袖式の横穴式石室を有する。また、石室平面プランは、台形状を呈す。

築造年代は、石室形態などから6世紀後半に比定できよう。　（衣川・今田）

(2)　中筋山手古墳群4号墳　（図版3・4・12・13）

〈立地・現状〉

中筋山手1丁目に現存する4号墳は、主尾根が標高約 150 m附近で分岐して南へ下る尾根筋にある。この尾根は、標高 100 m附近から西側に幅を拡大し、緩やかな南傾斜面を形成しているが、それに比べて東側斜面は急傾斜となる。古墳は、南緩傾斜面、標高約87 m附近に立地するものである。古墳の北東側には、高圧鉄塔が建設され、それによる地形の改変がなされている。なお、石室内には、現在祭壇が設置されている。

〈墳　丘〉

墳丘は、北から南に延びる尾根上に築造されている。現在墳丘は、南西部で封土が流出し、石室羨道部ならびに玄室部の天井石の一部を露出する。また墳丘中央の東方を、小径が南北に走り、若干の封土流出が認められる。このほか、墳丘北側に高圧鉄塔が建設された際、墳丘北東部が削平され、墳丘西部には、西南方向へ延びる新しい溝が掘られ、その南端にコンクリート製の水溜が造られている。以上のように墳丘の裾部は、人為的削平、封土流出による変形がみられるが、墳丘中央部はほぼ旧状をとどめるものと考えられる。

墳丘を実測図で見ると、高さ約3 m、径約16 mの円墳で、北で標高90 m、南で標高87.25 mに基底線をおくものと考えられる。

ところで当古墳の墳丘は、規模に比して大きく見える。これは墳丘が尾根地形を有効に利用しているためだが、このような視覚的な効果は、墳丘築造時に意識されたものであろう。なお、石室奥壁の位置は、墳丘中央部より若干北側にある。

〈石　室〉

現在、石室内部には祭壇が設けられ、床面はセメント舗装がほどこされている。しかし石室の保存状況は、良好である。

当墳の石室は、主軸をN－14°－Eにとり、南に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の現存長は、西側壁で7.4 m、東側壁で7.2 mあり、玄室長は西で3.9 m、東で4.2 mを測る。玄室幅は、奥壁部で最小の1.8 m、袖部で最大幅の2.2 mを測り、玄室の平面プランは緩やかに外に向って開く形態をとる。現存羨道長は西で3.5 m、東で3.0 mを測り、羨道幅は1.7 ～ 1.8 mである。

石室高は、現在、玄室で1.7 ～ 1.8 m、羨道で1.5 ～ 1.6 mを測り、玄門石上の段差は20cmほどである。現在のセメント面は、石材の露出状況からすれば、ほぼ築造当時の床面に近いと推定される。

当墳の使用石材は巨石である。特に奥壁には約1.8 × 1.8 mの一枚石を使用する。側壁は、玄室、羨道ともに2段積みを基本とするもので、第1段目は巨石を縦積みし、第2段目は第1段目に劣るもののやはり大型の石を横積みする。天井石は、玄室部に2枚、羨道部に1枚架構するが、いずれも扁平な巨石を使用している。なお、玄室部と羨道部は、わずかな段差をもって区別されているが、その位置は、玄門の位置と一致しない。

以上のように、当墳の石室は、平面プランや構築法から考えると、両袖式の形態をとるものの、玄室と羨道の区別は、ほとんど意識されないことが知れる。すなわち、玄室幅と羨道幅にほとんど差のないこと、両側の玄門石の位置に対応性のないこと、天井石の段差と玄門部が合致していないことである。

〈小　結〉

中筋山手古墳群4号墳は、南北に延びる尾根の標高約87m附近に位置し、両袖式の横穴式石室を有する径約16m、高さ約3 mの円墳である。石室は巨石で構築されているが、玄室と羨道に明確な区分がなされていない。

なお、築造年代は、無袖式に近い石室形態などから6世紀末から7世紀初頭に比定できよう。

（衣川・今田・西川）

(3)　中筋山手古墳群5号墳　（図版5・14）

〈立地・現状〉

主尾根が標高約150 m附近で南と南東方向に分岐し、南へ下る尾根は4号墳附近まで延び、他方南東に派生する尾根上には、2基の古墳が存在する。この尾根は、標高約130 mの5号墳近辺まで緩やかな傾斜が続き、高圧送電線鉄塔附近で急傾斜となり、鞍部を形成し、7号墳近辺に至る。行政区画では、両古墳周辺は中筋山手3丁目である。

5号墳は、南東に延びる緩やかな尾根の頂上部からわずかに下った南傾斜面に存在する。この南傾斜面は、土採り工事による削除のため崖となる。古墳はその崖端、標高約132 mに立地し、この位置は、7号墳の北面、比高差約32mの地点である。なお、当石室東側壁の一石は、調査後日、抜き取られていた。

〈墳　丘〉

墳丘は、封土の流出が著しく旧状をとどめていない。また、墳丘裾部に関しても、南側において削平を

受け、さらに西側に山水による小溝が走っているため、旧状を保っているとは断定できない。しかし、客観的に判断すると、径6～7 m、高さ1 m前後の円墳と推定できる。

〈石　　室〉

石室は、主軸をN－15°－Eにとり、南に開口している。しかし、採土工事あるいは自然流出のため、その残存状態は悪くわずかに奥壁2石、東側壁2石、西側壁1石の計5石が遺存するのみである。

石室規模は、東側壁残存長0.7 m、西側壁残存長0.42 m、石室幅0.8 m、石室残存高0.5～0.75 mを測る。

奥壁の石材使用法は、大小2つの石を並べて縦積みとしている。この用法は、隣接の古墳群でよく認められる無袖の小型横穴式石室のそれと同様である。壁の石組みは、残存部から判断して1段目は主として縦積みで、少なくともその上に1～2段の横積みがなされていたと思われる。

以上のように石室幅から、あるいは石材使用法から推定するならば、5号墳の内部主体は、石室長が3.5 m前後、石室幅0.8 m、石室高1 m未満の無袖の小型横穴式石室であると考えられる。

なお、天井石、あるいは外区列石などの施設は確認できなかった。また、石室内はすでに盗掘された形跡があり、遺物は遺存してないと考えられる。

〈小　　結〉

5号墳はほとんどその旧状を保っていないが、石室形態から無袖の小型横穴式石室を内部主体とする小円墳であると推定できる。また、その築造年代は、7世紀前半に比定できよう。　　（衣　川）

(4)　中筋山手古墳群7号墳　（図版6・7・15）

〈立地・現状〉

7号墳は、有高稲荷神社社殿後方にあり、標高約100 mの地点に立地する。

〈墳　　丘〉

封土は、人為的に削平され石室を露呈している。今回の地形実測の結果、墳丘裾部において円形にめぐる等高線から、径約15 mの円墳が考えられる。墳丘高は、石室から推定して約2.5 mばかりであろう。

〈石　　室〉

石室は、主軸をN－28°－Wにとり、南南東に開口する横穴式石室である。現状観察からは、西側の袖が確認でき、片袖式と考えられるが両袖式の可能性も含む。

外観すると石室規模は、石室現存長約6 m、玄室長約4 m、羨道現存長約2 m、玄室奥壁約1.3 m、羨道幅約1.1 mである。玄室中央部の幅が約1.6 mであることから、若干胴張りした石室であると考えられよう。

天井石は自然な花崗岩が、羨道部に一枚、玄室部に2枚遺存している。しかし、築造当時には、4～5枚の天井石が使用されていたと思われる。また、奥壁は1枚石を使用せず中型の石を積み上げている。

外から観察すると、側壁は東側壁の3段目、西側壁の2段目が露出していると思われる。まだ地中に埋

まっている分と上に積みたされる可能性を考慮すると、築造当時には4～5段積みで石室の高さは2 m前後ではなかったかと推定できる。

持ち送りについては、玄室の幅、天井石の幅ならびに使用石材の規模などから察すると、若干ではあるが施されていると考えられる。

〈小　結〉

7号墳は、有高稲荷神社社殿の裏にあり、尾根の最高点、標高約100 mの地点に立地する右片袖式あるいは両袖式の横穴式石室を有する円墳である。

築造年代は、石室形態などから6世紀後半に比定できよう。　（西　川）

Ⅴ.　ま　と　め

(1)　分布状況　（第4図）

中筋山手古墳群は西を勅使川に、東を天神川に画された地区に分布する。その範囲は東西約700 m、南北約350 mに及ぶが、地勢から各古墳の立地に着目すれば、4つのまとまりをなして分布する。当地区の地形は大局的にみれば、北西から南東へ走る主尾根がその先端部において三方に分岐し平地へと続く。

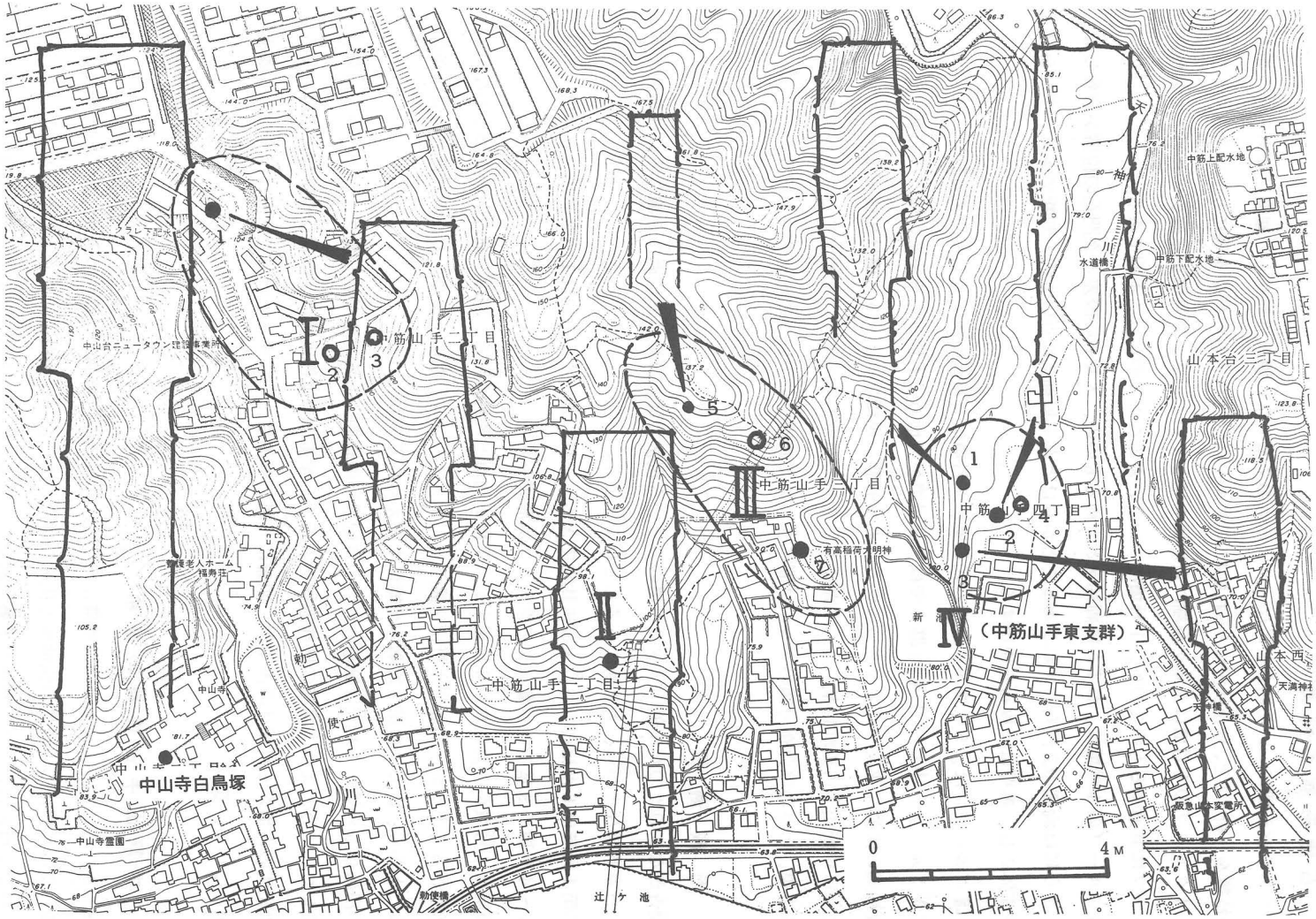
まず1・2・3号墳の3基は、主尾根の西斜面、勅使川を遡り山側へはいり込む地点に立地する。[①] これらは尾根稜線上を避け、勅使川に落ち込む斜面を選び、河川を意識したものといえる。

次に4号墳が三方に分岐した支尾根のうち、西側のそれの突端に、1基のみ存在する。当墳が他の古墳と一定の距離を保ち、ひとつの支尾根を独占するかたちで立地することは、石室形態の特異性、墳丘の卓越性とあいまって、4号墳が他の古墳から隔絶した墳墓、いわば盟主的存在であることを示すであろう。このことは勅使川を挾んで中山寺白鳥塚古墳と対峙することからも興味深い。

また、中央の支尾根に5・6・7号墳の3基が標高約100 m～130 mにかけて分布する。これらは6号墳、7号墳の間に急峻な斜面がありながらも同一尾根の稜線上にならんでおり、ひとつのまとまりとしてとらえうる。

そして中央支尾根東方直下の傾斜変換線附近に4基が分布する。これらは中筋山手東支群とされるが、天神川の河原へ緩やかに傾斜する標高約70 m～75 mの斜面に立地し、当古墳群中最も低く、かつ尾根裾に形成される点、趣を異にする。

以上のように中筋山手古墳群は、立地から4つのグループに別れ分布する。そしてそれぞれのグループは、同一尾根上に分布することなく、東西方向にならぶ。このうち4号墳は単独で、他は3～4基で1グループを構成する。ここではこれらを便宜的にⅠ～Ⅳとし、以下すすめていきたい。



第４図　　中筋山手古墳群石室平面比較図（中筋山手東支群は『宝塚市史』資料編Ｉによった）

(2) 石室形態の特徴

11基のうち石室形態について明らかになっているもの7基（7号墳は外形からの観察ではあるが）をもとにその特徴を分析すると、分布状況にみられた4つのグループは、それぞれの特徴を異にしていることが解る。

まず、Ⅰグループの1号墳は玄室が極端に台形状を呈している。2・3号墳が未確認のため、この傾向はⅠグループに共通するものなのか、1号墳についていえることなのかは、不明である。

次にⅡグループの4号墳は、わずかに両袖をとどめるものの、天井石の段差と玄門石の位置が合致しないこと、さらには両側の玄門石にずれがあることからほとんど無袖式に近いものと判断できる。また石材は巨石を主体とし、奥壁は一枚石を使用する。

そしてⅢグループでは、5号墳が小型横穴式石室、7号墳は有袖式の横穴式石室である。②

さらにⅣグループ（中筋山手東支群）では、2号墳が当地方でも珍しい複室系の横穴式石室、1・3号墳は両袖式の狭長な平面プランをもっている。石室形態、規模など1・3号墳は類似する。

このように中筋山手古墳群11基のうち7基より、6つの石室形態のタイプを抽出することができた。これは、各古墳、とりわけ分布分類のグループ間にきわめて共通性の少いことを示すであろう。

(3) 形成過程

発掘調査がなされたのが中筋山手東2号墳のみという現状では、詳細に形成過程を論じるのは無理であろうが、石室形態などから、大まかにみることはできよう。

形成の第1段階は6世紀後半から末頃に比定できる。これに該当する古墳は1～3号墳、6号墳、7号墳、東1～4号墳の9基でⅠ、Ⅲ、Ⅳのグループが形成をみる。

第2段階は4号墳が造営された6世紀末から7世紀初頭と考えられる。当墳を前段階のものとしないのは石室形態からであるが、前面に平野部を眺望し、Ⅰグループを谷間に追いやったような絶好の立地条件を占めることから、あるいは第1段階の可能性も考えられるかもしれない。

最後の段階は5号墳が1基だけ築造された7世紀前半の時期である。すなわちⅢグループのみが造墓活動を継続した。こうして当古墳群の形成過程をみると、雲雀山東尾根古墳群、雲雀山西尾根古墳群のように、7世紀代の古墳が6世紀代の古墳群と明確に分離し群集墳を形成するといった状況は全くなく、両者は好対照をなしている。

(4) 中筋山手古墳群の性格

以上みてきたことから、長尾山の古墳群における、中筋山手古墳群の性格を論ずれば、当古墳群は6世紀代に関しては長尾山の古墳群の他地区と比較して、古墳の数量、規模ともに、大した格差はないと言える。ところが7世紀代に入ると歴然と劣勢に転化している。ここで注目できるのは、小型横穴式石室が単独で分布することである。こうした例は長尾山の古墳群中で他にみられなく、きわめて特異である。試みに小型横穴式石室の古墳群に着目すれば、最明寺川以東の平井古墳群、雲雀山西尾根古墳群、雲雀山東尾

根古墳群の6支群は、7～30基の群をなし、天神川と最明寺川に挾まれた地区では、山本奥古墳群の3～5基というように、いずれも数基をもって群在する。③ 石野氏が長尾山の古墳群を東半部の密、西半部の散在と対称的に比較したのは、6世紀代ではなく7世紀代前半の状況なのである。

ところで岡田氏は東半部、とくに最明寺川以東の造墓者の生産基盤を猪名川中流域に求めたが、中筋山手古墳群は地域的にみて武庫川との関連が強く、勅使川、天神川の2河川は伊丹段丘を南流したのち、武庫川に合流する。こうしたことから、当古墳群の被葬者は武庫川水系に経済的基盤をおいたことが推測されよう。古墳時代の集落址は武庫川水系ではきわめて分布が稀薄となっているが、中山出土の銅鐸、④ 安倉の前期古墳、奈良時代の米谷の蔵骨器などを考慮すれば、ひとつの地域的まとまりを想定できよう。

いずれにしろ7世紀にはいって、なんらかの歴史的背景により、当古墳群の背後にある集団は劣勢をまぬがれなかったと思われる。さらに言えば、この時期当地方は大きな社会的変化を迎えたが、その歴史事象との関与の度合は、地域ごとにかなりの差があったと推測される。すなわち長尾山の古墳群の7世紀前半の古墳が、天神川、最明寺川によって区分される3つの地区に、それぞれ分布しながら最明寺川より東の地区では1つの支群が7～30基によって構成され、最明寺川と天神川の間の地区では3～5基であり、天神川より西の地区では1基単独というように、存在形態を明らかに異にすることから、そうした情勢がうかがえるのではないだろうか。

（坂　井）

〈註〉

① 2・3号墳は未確認であるが、位置については葛野豊氏らの御教示を得た。

② 消滅した6号墳は石野氏の分布図にみられる2基のうち上方のものと考えられるが、小石室ではないと推定される。

③ 古墳の数は高井悌三郎『平井古墳群』をもとに当研究会が確認しえたものである。

④ 宝塚市教育委員会『宝塚市中山出土の銅鐸』（宝塚市文化財調査報告第8集　昭和51年）

［付　載］ 雲雀丘古墳群C支群北1号墳 （図版8・9・16）

〈位置・現状〉（第1図）

古墳は、長尾山の古墳群のうち、最も東側に分布する雲雀丘古墳群C支群に属する。行政区画では、雲雀ケ丘山手2丁目に位置し、生成幼稚園の正門西側にある。当支群が分布する尾根は、東側の急傾斜面から判断して、猪名川を隔てて五月山丘陵と向かい合う丘陵最東端の大尾根である。しかし、早くから宅地化が進行し、現在旧尾根全体を把握することは困難である。古墳は、南東に派生するこの大尾根の標高約116 *m*附近に築造された。

なお、調査は、当研究会が宝塚市教育委員会の委託を受けて、昭和50年12月に実施した。

〈墳　丘〉

墳丘は、南西に延びる緩斜面に築造されている。現在この附近は、宅地化が進み旧地形は変貌しつつあ

るが、墳丘の封土は裾部を除きほぼ旧状をとどめる。

墳丘は、石室開口部で天井石が失なわれており、封土が流入している。この他、墳丘東部が、生成幼稚園の進入路整備のため削除され、墳丘西側の裾部も、造庭工事の際に削平されて、現在では中型の石で区画されている。このように墳丘は、周囲で削平、削除、封土流出などによる改変がなされているものの、著しくはない。

実測図によると、現在の墳頂は標高119.50 *m*で、ほぼ旧状に近いと考えられる。墳丘は北で標高119.0*m*、南で標高117.50 *m*に墳丘基底をもち、径約14 *m*、高さ約3.5 *m*の円墳を築いたものである。

なお、石室奥壁の位置は、墳丘中央部よりやや北側にある。

〈石　室〉

当古墳の石室は両袖式の横穴式石室で、主軸をN－12°－Eにとり南に開口する。石室現存長は8.5 *m*、玄室長4.7 *m*を測る。現在石室前方の側壁延長上に後世の積石が接続しているが、墳丘や石室規模から推測して、石室全長が10 *m*程であったと思われる。玄室は奥壁で1.48*m*、袖部で1.7 *m*あり外方にやや広がり台形状を呈すが、狭長な平面プランである。羨道部は玄門幅が1.15*m*、現状羨門幅が1.30*m*と玄室同様広がるが、これは東壁側が外方にカーブしていることによる。玄門石は西側が袖より0.35*m*、東側が0.23 *m*突出し、西の袖が若干強調されている。ちなみに石室の玄室幅指数は32、羨道幅指数は78である。

玄室の高さは現状床面から2.2 *m*、羨道高は1.2 *m*を測る。現状の床面は、側壁石材の埋没状況からすれば、当初の床面レベルに近いと思われる。なお奥壁に近い部分で幅0.6 *m*、長さ1.7 *m*、深さ0.3 *m*の盗掘坑が穿たれ、この底部には小礫が散在する。これをもって床面と考えることもできようが、置土したことを考慮し現状床面レベル近くにかつての床面を推定できよう。入口附近床面のレベルが高くなるのは流入土の堆積もあるが、本来入口に向かって高くなっていたと思われる。

石室に用いられた石材は花崗岩で、いくつか角のない丸みを帯びた石のほかは、角張った石で面をそろえている。石室の構築は東西両側壁ともに玄室部で4段積み、羨道部で2段積みを基本とし、その上に人頭大の栗石を置き天井石を架構する。東側壁と西側壁を比較すると、前者は1段目に比較的大きな石材を縦積みしているのに対し、後者は1段目がそれほど大きくなく、2段目、3段目に大型の石を積んでおり不安定な感じを与える。またかなりのもち送りがみられる（天井幅は約1 *m*）が、東側壁がとくにきつく西側壁はほとんど直立している。

奥壁は1段目に最も大きな石を縦積みし、その上に4段横長の石を横積みし、さらに栗石がのる。

天井石は玄室部に4枚、羨道部には2枚架構されているが、1枚落石した可能性がある。

なお、現状では5ケ所側壁が崩落して、うしろの裏込め石と土砂が露出する。

〈小　結〉

北1号墳は長尾山の古墳群のうち最東端に位置し、標高116 *m*の尾根上に存在する。古墳は径約14 *m*、高さ約3.5 *m*の円墳で、内部主体として狭長な両袖式の横穴式石室を有する。

築造年代は、石室形態などから6世紀後半に比定できよう。　（坂井・衣川・今田）

古墳調査結果一覧表

中筋山手古墳群

古墳名	墳形	立地・標高	墳径	墳丘高	内部主体	石室形態	石室主軸	開口方向	石室長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	備考
1号墳	円墳	尾根傾斜面 108m	15	3	横穴式石室	両袖式	N 5°E	南	現存 7.6	3.9	奥壁 1.5 袖部 2.1	2.2	現存 3.7	玄門 1.2 羨門 1.4	約1.2	公園内現存
4号墳	円墳	尾根傾斜面 87m	16	3	横穴式石室	両袖式	N14°E	南	東側壁 7.2 西側壁 7.4	東側壁 4.2 西側壁 3.9	奥壁 1.8 袖部 2.2	現状高 1.7 ～ 1.8	現存東側壁 3.0 現存西側壁 3.5	1.7 ～ 1.8	現状高 1.5 ～ 1.6	石室内祭壇設置 床面セメント舗装
5号墳	小円墳	尾根傾斜面 132m	6 ～ 7	1	小型横穴式石室	無袖式	N15°E	南	現存東側壁 0.7 現存西側壁 0.42		0.8 (石室幅)	現状高 0.5 ～ 0.75				破壊著しい（現在東側壁は一石のみ残存）
7号墳	円墳	尾根上 約100m	約15	約2.5	横穴式石室		N28°W	南南東	現存 約 6	約4	約1.3	約2	現存 2	1.1		石室露出 稲荷神社社殿後方

雲雀丘古墳群C支群

北1号墳	円墳	尾根上 116m	14	3.5	横穴式石室	両袖式	N12°E	南	現存 8.5	4.7	奥壁 1.48 袖部 1.7	2.2	3.8	玄門 1.15 羨門 1.3	1.2	